様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３７５０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６５１２８９

研究課題名（和文）マレーシアにおける女性の表象－女性器切除をめぐる言説の政治－

研究課題名（英文）The Representation of Women in Malaysia: Political Discourse over Female Genital Mutilation

研究代表者
井口　由布（IGUCHI, Yufu）

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授

研究者番号：８０４１２８１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はマレーシアにおいて女性がどのように表象されてきているのかを、女性器切除（FGM）をめぐる言説をみることによって、植民地主義、ナショナリズム、多民族社会、イスラムとの関係から明らかにしようとした。本研究においてわかったことは大きく以下の二つである。第一に、マレーシアのFGMが近年のイスラム復興の動きの中であらためて見いだされかつ強化されており、その動きがマレーシアのマジョリティであるマレー系を中心としたナショナリズムと呼応していること。第二に、FGMの研究とそれにともなう言説がアフリカにおける状況を中心に形成されており、マレーシアの状況に合致しないことである。

研究成果の概要（英文）：This study explores how women in Malaysia are represented in relation to colonialism, nationalism, multi-ethnic society and Islam, by examining the discourses on Female Genital Mutilation (FGM) in Malaysia. The major findings of this study are as follows. First, practices of FGM in Malaysia have been rediscovered and reinforced in the recent Islamic resurgence and they are connected to Malay nationalism centered on Malays, the majority population of Malaysia. Second, studies on FGM and the subsequent discourses are centered on Africa and are not fitted to the Malaysian situation.

研究分野：ジェンダー研究

キーワード：ジェンダー表象　マレーシア　女性器切除　植民地主義　ナショナリズム　イスラム

１．研究開始当初の背景

国際社会が女性器切除 female genital mutilation (FGM)について問題にしたのは、1952 年の国連人権委員会 UN Commission on Human Rights であったようだ。しかしながら、FGM にかんしての調査が開始されたのは 1970 年代後半からである。世界保健機構 WHO は 1970 年代後半から FGM にかんする調査を開始し、1982 年 6 月に「女子割礼に関する WHO の立場と活動報告書」をだした。同年、スーダンの首都ハルツームの WHO 事務局職員であったフラン・ホスケンによる『ホスケン・レポート』も出版されている。その後 1995 年の北京女性会議や当事者女性たちによる自伝などが出版されるようになるにつれて、今日 FGM は問題として広く知られるようになっている。

WHO では、FGM を４つのカテゴリーに分類している。第一はクリトリスの一部または全部の切除（クリトリデクトミー）、第二はクリトリスの切除と小陰唇の一部あるいは全部の切除（エクシジョン）、第三は外性器の一部または全部の切除および膣の入り口の縫合による狭小化または封鎖（陰部封鎖）、第四はその他である。

本研究では、東南アジアの優等生といわれ、経済成長を果たし政治的にも安定しているマレーシアにおける FGM に着目している。研究開始当初において、研究代表者はマレー系の女性のあいだで FGM が広く実践されていることについては知っていた。マレーシアにおけるマレー系は人口の５割以上を占めるマジョリティで、憲法上の定義では、イスラムを信仰し、日常的にマレー語を話し、マレーの慣習（アダット adat）にしたがって生活しているというものである。

しかしながら、マレーシア政府がマレーシアにおける FGM の実践についてどのような態度をとっているのか、どれほどのマレー系女性たちが FGM を経験しているのか、またマレーシアにおける FGM はどのようなものなのか、マレーシアの FGM に関する研究がどれほど存在するのかなどについては明らかではなかった。

２．研究の目的

本研究は、マレーシアにおいて女性がどのように表象されてきているのかを、植民地主義、ナショナリズム、多民族社会、イスラムとの関係から明らかにしようとするものである。本研究はこのことを、FGM をめぐる言説から読み解こうとしている。本研究の目的は、前近代的で非人道的な実践として FGM を批判することや、伝統的な価値観としてこれを擁護することにはない。むしろ、本研究は FGM を近代的な問題としてとらえなおし、第三世界の女性をめぐる政治のなかに位置づけること、さらには先進工業国の女性をもふくめた女性とセクシュアリティの問題を再考することを目的としている。

３．研究の方法

本研究が主にとる方法はマレーシアの女性表象に関する言説分析である。本研究が対象とするのは、マレーシアにおける FGM にかんする表象という、これまでほとんど扱われてこなかった主題である。そこで期間を通して最も集中したのは、マレーシアにおける FGM にかんする資料を効果的に収集することである。現在の言説にかんしては、国際機関、マレーシアの省庁、その他（新聞、雑誌、ブログなど）において収集を行った。これに並行して行ったのは、FGM にかんする研究をしているある研究者への直接的な聞き取りである。マレーシアにおける FGM に関する状況を把握するということ以外では、理論研究を進めることと研究者ネットワークの形成を図った。理論的観点からは、家父長制やミソジニーなどを中心にジェンダーとセクシュアリティの観点から FGM をどのようにとらえていくべきかについて研究した。ネットワーク形成という点では、ジェンダーやセクシュアリティ、カルチュラル・スタディーズ、東南アジア研究だけでなく、社会医療などのメディカル・サイエンスにかんする研究者との交流も実現させることができた。

４．研究成果

研究成果として、第一に FGM を理論的にどうとらえるかについて考察したことをまとめる。第二に、マレーシアの FGM にかんする言説状況について記す。第三には、この期間内における発表論文と口頭発表について、本研究とどのように関連しているかについて述べる。

理論的な観点からの検討において、第一に着目したのは家父長制との関連である。女性のセクシュアリティを家父長の所有物としてみなすことという点にかんして、FGM はまさに家父長制的実践であるといえよう。ただし、そこでは家父長制を前近代的実践としてみるのか、資本主義によって再編成されているとみなすのか、近代的制度ではあるが資本主義とは別論理でうごくとみなすのかという問題がある。

第二に検討したのは、FGM の実践がじつのところ女性の性欲を認めているという上野千鶴子の指摘である。つまり FGM の認識論的前提は、近代西洋的なセクシュアリティと異なっている可能性があるというのである。ジャーナリストの内海夏子は『女子割礼』（2003 年）において、FGM の背景には女性の性的欲望にたいする男性の恐怖があるということを指摘している。これは先の上野のミソジニーの問題と関係するだろう。

第三は、身体と境界という観点から考察したときの FGM である。浮ヶ谷幸代によれば、「穢れ」は分類の境界領域において発生するという。男子の割礼、剃髪、抜歯、入れ墨、耳への穴あけなど、イニシエーションと関係

する肉体の損傷や加工は、身体の表面部すなわち境界域においておきる。FGM を「浄」「不浄」という、近代的衛生概念の外部（ないしは境界）において考察する可能性もあるのではないか。FGM が伝統的な共同体の中において一人前の大人の女性となる通過儀礼としてみなされてきたという報告がある。とはいえ本研究は FGM をたんなる前近代的な実践の残滓とみているのではないため、この「浄」「不浄」という概念自体が近代社会の中でどのように位置づけられるのかを考察する必要がある。

第四に FGM と表象・代表についての諸議論を整理する必要がある。FGM はこれまで非人道的な実践としてみなされる一方で、それを実践する側からは伝統的な実践として擁護されるという対抗関係があった。そこには西洋中心主義と反植民地主義という関係性がある。

次にマレーシアにおける FGM の状況、その言説にかんする状況を述べていきたい。マレーシアは政府としては FGM を禁止している。また、女性にかんする差別撤廃条約にも批准し、WHO が進める FGM 廃絶のためのさまざまなアクションやプランを実行している。しかしながらその一方で、2009 年に FGM がイスラム的にみて合法なのか非合法なのかにかんするファトゥワがだされた。ファトゥワとは、宗教学者ムフティによる方角意見である。マレーシアの場合はイスラムが国教となっているため、マレーシア政府のイスラム推進局 Jabatan Kemajuan Islam Malaysia がファトゥワを管理している。2009 年の解釈では、痛みをともなわないかぎり FGM は合法であり、FGM を基本的にはイスラムにかなう実践とみなしている。

それではマレーシアにおける FGM はどの程度実践されているのであろうか。マレーシアの保健省などでは統計調査をしておらず、公式の数字はわからない。アメリカのインターネット・ニュース・サイト『グローバル・ポスト』は 2013 年の記事において、マラヤ大学社会医療予防医療学部 Department of Social and Preventive Medicine のマズナ・ダールイ教授の調査を引用しつつ、調査対象のムスリム女性の 93.9%が FGM を経験していると報道した(Elizabeth Segran, “Female genital mutilation on the rise among Southeast Asian Muslims”December 10, 2013)。残念ながら、調査対象が何名なのかまたどのような人々なのか報道は明らかにしていない。1999 年にクランタン州の病院で行われた調査では、調査対象であった 262 人のマレー系女性のすべてが FGM を経験していると証言した(Rashidah Shuib, Abu Rahman Isa, M. Shukari Othman, “The Practice of Female Circumcision among Muslim in Kelantan, Malaysia” (1999)。研究代表者が 2014 年に行ったインタビューにおいて、ペナン・メディカル・カレッジのアブドゥル・カーン・ラシッド教授は、これまでの調査からおそらく 99%のマレー系女性は FGM を経験しているだろうというショッキングともいえる指摘をした。マレーシアでは、FGM を経験している女性がマレー系を中心に多数を占めているようなのである。

マレーシアにおける FGM 実践についての最も古い研究報告は、元 WHO 職員であったフラン・ホスケンによる FGM についての有名な報告書『ホスケン・レポート』（1982 年）におけるものである。翌年には、人類学者のキャロル・レダーマンが Wives and Midwives: *Childbirth and Nutrition in rural Malaysia*. (1983)において、トレンガヌ州における FGM について報告をしている。レダーマンは、トレンガヌにおける FGM についてクリトリデクトミーとは異なる形態であるとし、クリトロドトミー clitorodotomy という独自の言葉を使って表現した。マレーシアにおける FGM の形状をどのように分類すべきかということに関しては、Toubia の *Femal Genital Mutilation: A Call for Global Action* (1993)も論じている。前述の Rashidah らによる論文では、マレーシアにおける FGM は切除をしていないのであるから、割礼と呼ぶべきではないかと指摘している(Rashidah et al. 1999)。ちなみにマレーシア語では FGM は khatan wanita や Sunat wanita という言葉で表現されている。khatan も sunat も割礼を表し、ふつうは男性の割礼にかんして使われる。これらの議論から、マレーシアにおける FGM が WHO のカテゴリーにうまく適合しないことが見えてくる。

この３年間でわかったことをまとめると以下になる。第一にマレーシア政府が FGM を禁止しているにも関わらず、FGM はマレー系女性を中心に広く実践されている。第二に、マレーシアにおいてファトゥワを管理するイスラム推進局は、2008 年に条件つきでありながら FGM をワジブ（義務）とした。第三に、マレーシアで実践されている FGM は、クリトリスの先端に微小な切り込みをいれるものとされ、厳密な意味での「切除」ではないため、Rashidah et al. (1999)は WHO の４類型に当てはまらないと主張する。第四に、Rashidah et al. (1999)によれば、FGM を経験していると主張する女性たちへの医学的な調査では、どのケースにおいても手術痕が見当たらなかった。第五に伝統的な施術による FGM は減少しているものの、病院で行う FGM（FGM の医療化）の割合が増加している。第六に、Abdul Khan Rashid, Sapna S. Patil, Anita S. Valimalar, “The Practice of Female Genital Mutilation among the Rural Malays in North Malaysia” (2010) の聞き取りの結果によれば、FGM 経験者の女性たちの多くは他の国や地域とは異なって、FGM が女性の性的な欲望をより高めると考えている。

以上のようなマレーシアにおける FGM の特徴から、言えることは大きく二つあるだろう。第一に、マレーシアの FGM が近年の

イスラム復興の動きの中であらためて見いだされかつ強化されており、その動きがマレーシアのマジョリティであるマレー系を中心としたナショナリズムと呼応していることである。第二に、FGM の研究とそれにともなう言説がアフリカにおける状況を中心に形成されており、マレーシアの状況に合致しないことである。

今後は、マレーシアにおける現状を引き続いて把握すると同時に、FGM を性器の加工という視点からとらえなおすため身体に関する議論を検討し、セクシュアリティの支配と国民主体の形成との関連から FGM を位置づけていこうと考えている。例えば、Ronan M. Conroy "Female Genital Mutilation: Whose Problem, Whose Solution" (2006)のように美容整形との関係や、男性の割礼、去勢のような他の性器の加工とともに FGM を位置づけなおすことである。

最後に、３年間の研究期間中の具体的な成果について記しておく。この３年間に研究代表者は、１本の査読論文を出版し、１度の発表を行った。"Post-Colonial Identity Formation in Malaysia" (2014)は、本研究の理論的な枠組みを提供する論文である。マレーシアにおける国民的なアイデンティティが、マレー性、多民族社会、イスラムといったさまざまなカテゴリーによる緊張関係の中において構築されていること、それらが植民地主義的な問題系の中にあることを論じた。2014 年の香川大学における研究発表会では、ファーニヴァルの「プルーラル・ソサエティ」論について発表を行った。ファーニヴァルの議論は、マレーシアにおける多民族社会言説の起源ともいえるものであり、その後におけるエスニシティ論などとも絡み合って今日にいたるまで発展しているといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

<u>Yufu IGUCHI</u> "Post-Colonial Identity Formation in Malaysia: Tensions in the Canon of Zainal Abidin bin Ahmad" (*Asia Pacific World* Vol.5. No.1, April 2014). 92-109.［査読あり］

〔学会発表〕（計 1 件）

<u>井口由布</u>「ファーニヴァルのプルーラル・ソサエティ論：植民地政策学、地域研究、そして」第 2 回「新・複合社会論」研究会（香川大学、2014 年 10 月 25 日）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
井口由布（IGUCHI, Yufu）
立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授
研究者番号：80412815

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：